

# メバチ インド洋

Bigeye Tuna, *Thunnus obesus*



**管理・関係機関**

インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

**最近一年間の動き**

2013 年 10 月に開催された IOTC 第 15 回熱帯まぐろ作業部会で資源評価が実施され、2012 年時点で漁獲圧及び産卵親魚量はそれぞれ MSY レベルの 0.42 倍、1.44 倍（いずれも SS3 複数シナリオの中央値）と推定され、資源は過剰漁獲及び乱獲状態ではないとされた。総漁獲量はピークである 1999 年の 16.0 万トンから年々減少傾向にあり、2012 年 (11.6 万トン) には前年より増加したものの、ピーク時と比べるとまだ少ない。漁獲量が低水準である原因は、ソマリア沖の海賊の活動範囲が広がり多くののはえ縄船が他の大洋へシフトしたためである。

- 生物学的特性**
- 寿命：10～15 歳
  - 成熟開始年齢：3 歳
  - 産卵期・産卵場：周年・表面水温 24℃以上の海域
  - 索餌期・索餌場：4～9 月に南半球温帯域に現れるほか、温帯域と熱帯域を複雑に回遊
  - 食性：魚類、甲殻類、頭足類
  - 捕食者：さめ類、海産哺乳類

**利用・用途**

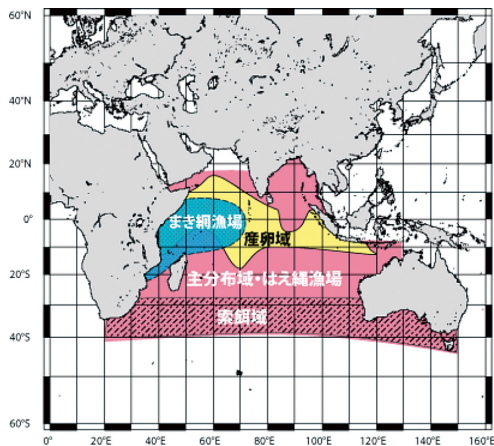
刺身や缶詰原料

**漁業の特徴**

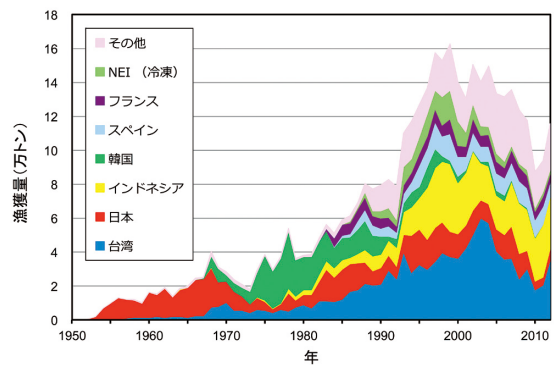
本種ははえ縄（2 歳以上対象）とまき網（0～1 歳対象）で主に漁獲される。本資源のインド洋における漁獲は日本のはえ縄漁船により、1952 年にジャワ島南部海域で始まった。その後、台湾、韓国のはえ縄漁船がそれぞれ 1954 年、1965 年から参入した。まき網の主要漁業国はスペイン、フランスである。西インド洋の EU まき網開始（1984 年）以前は、はえ縄による漁獲が大半で主に 2 歳魚以上であったが、まき網による 0～1 歳の漁獲尾数が急増し、近年では総漁獲尾数の 7 割近くを 0～1 歳が占める。最近 5 年間の漁法別の漁獲量は、はえ縄 65%、まき網 28%、その他 7%、また海域別では FAO 海域 51（西インド洋）における漁獲量 53%、FAO 海域 57（東インド洋）47% となっている。

**漁業資源の動向**

はえ縄による漁獲量は、操業開始以来緩やかに増加し、1992 年に 6.5 万トンに達したが、1993 年に 9.0 万トンに急増し、1998 年には 11.8 万トンとピークに達した。そして、1999 年からはいったん減少したが再び増加し、2004 年には 11.8 万トンと 2 度目のピークに達した後減少、2010 年には 5.2 万トンになり、1984 年以降最低レベルとなった。その後は再び増加に転じている。一方、まき網は 1984 年より西部インド洋で本格的に始まり、漁獲量は徐々に増加し、1999 年には 4.4 万トンとピークに達したが、その後 2～3 万トンの間で変動しながら徐々に減少し、2012 年には 2.2 万トンとなった。総漁獲量は、操業開始以来増加し 1988 年に 7 万トン台になった。1992 年から急増し、1993 年に 10 万トン台、1999 年に 16 万トン台とピークに達した。その後、2000 年から減少傾向が続き 2010 年に 8.7 万トンと 1993 年以降最低レベルとなった。それ以降は再び増加している。



インド洋のメバチの漁場



インド洋メバチ国別漁獲量（1950～2012 年）  
NEI：Not Elsewhere Included  
(IOTC データベース：2013 年 9 月)

資源状態

2013 年の第 15 回熱帯まぐろ作業部会では、統合モデルの SS3、年齢構成プロダクションモデルの ASAP 及び ASPM により資源評価が行われた。SS3 では日本のはえ縄の標準化 CPUE のみを使用され、解析結果は、 $MSY=13.2$  万 (9.8 ~ 20.7 万) トン (12 シナリオの中央値及び範囲)、 $F_{2012}/F_{MSY}=0.42$  (0.21 ~ 0.80) 及び  $SSB_{2012}/SSB_{MSY}=1.44$  (0.87 ~ 2.22) であった。2012 年の漁獲量は 11.6 万トンで過去 5 年間の平均漁獲量は 10.8 万トンなので、漁獲は  $MSY$  レベルを下回っており、過剰漁獲及び乱獲状態ではないとされた。

また、リスク解析結果、漁獲圧、産卵親魚資源量ともに、現状の漁獲量を 40% 増加しても 10 年後に  $MSY$  レベルを割り込むリスクは 25% であることがわかった。

管理方策

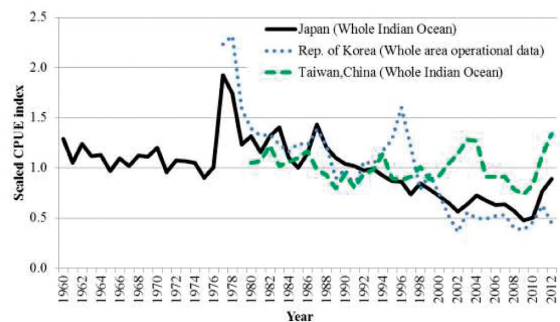
第 15 回熱帯まぐろ作業部会 (2013 年 10 月) における資源評価結果を受け、第 16 回科学委員会 (2013 年 12 月) は、現状の漁獲努力量は  $MSY$  レベルを下回り、資源量はそれを上回っているため、この状態が続けば、特に資源管理方策の必要はないが、引き続き資源状況のモニター及びデータ収集する必要があると勧告した。その他、2005 年の第 9 回年次会合においては、台湾に対して年間 3.5 万トンに漁獲制限することが要請された。関連した管理方策には、漁船数増加禁止 (船体 24 m 以上)、まき網・はえ縄漁業ログブック最低情報収集の義務及びオブザーバープログラム (2010 年 7 月より) がある。

資源評価まとめ

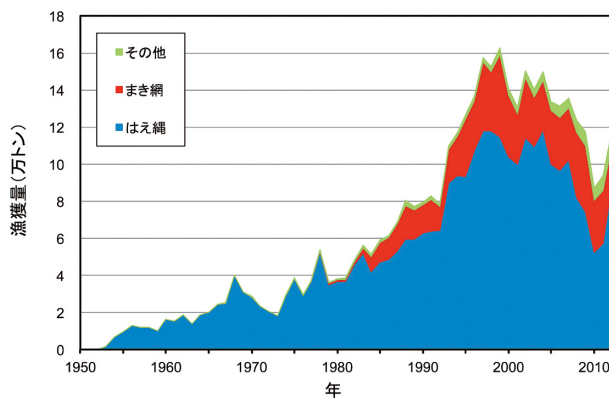
- $MSY=13.2$  万トン (2012 年の漁獲量は 11.6 万トンで過去 5 年間の平均漁獲量は 10.8 万トン)
- $F_{current}/F_{MSY}=0.42$  及び  $SSB_{current}/SSB_{MSY}=1.44$
- 漁獲圧は  $F_{MSY}$  を相当下回っており資源量は  $SSB_{MSY}$  を上回っているため、過剰漁獲及び乱獲状態ではない。

資源管理方策まとめ

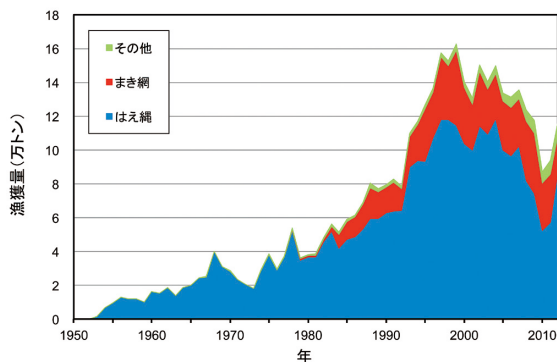
- メバチ資源管理
- 現在の低い漁獲圧が続けば特に管理方策はないが、引き続き資源状況をモニターする必要がある。
  - 台湾のはえ縄漁獲割当 (上限 3.5 万トン)
  - 漁船数増加禁止 (船体 24 m 以上)
  - まき網船・はえ縄船ログブック最低情報収集の義務
  - IOTC 地域オブザーバープログラム (2010 年 7 月より)



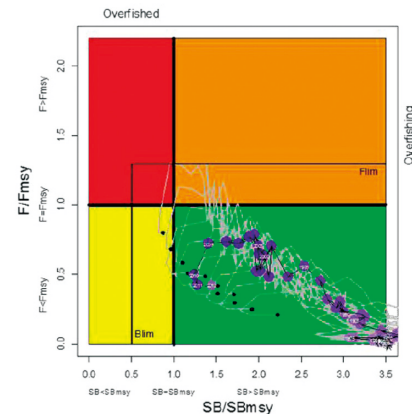
日本、韓国、台湾まぐろはえ縄の標準化されたメバチ CPUE



インド洋メバチ漁業別漁獲量 (1950 ~ 2012 年)  
(IOTC データベース : 2013 年 9 月)



インド洋メバチ海域別漁獲量 (1950 ~ 2012 年)  
(IOTC データベース : 2013 年 9 月)



インド洋メバチ資源評価 (SS3) 結果に基づく資源状況変遷を示す Stock trajectory (神戸プロット)。紫色は 12 シナリオの中央値、灰色はそれ以外のシナリオ。

メバチ (インド洋) の資源の現況 (要約表)

資源水準	中位
資源動向	増加
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	8.7 ~ 12.4 万トン 平均 : 10.8 万トン (2008 ~ 2012 年)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	0.5 ~ 1.5 万トン 平均 : 0.8 万トン (2008 ~ 2012 年)